

# 黒豹注意報 3

～新米OLタンポポの奮闘～

## もくじ

黒豹注意報 3 5

番外編  
小さな花の大きな愛情 265

黑豹注意報 3

前巻のおさらい

ここは日本最大手文具メーカーの社長室。大会社の社長室に相応しく重厚なデスクが置かれている。今、そこに座っているのは秘密文書を手にしたスパイ……でもなく、ただのこそ泥でもなく、もちろん社長。

彼はデスクに肘をつき、組んだ手の上に顎先を乗せている。そんな何気ないポーズでも絵になつてしまう美貌の持ち主だが、なぜかその麗しい顔は苦々しく歪んでいた。

「おい、竹若」

第一秘書を呼ぶ声が低い。

「はい、なんででしょうか」

答えた彼も、社長とはタイプが違うものの整った顔立ちをしている。その表情は社長とは違い、穏やかそのもの。

「お前、社内での行動にはあれほど気をつけるって言っただろうが。人前で愛を囁いたり、抱きしめたり、お前には恥じらいというものがいいのか。純情な小向日葵君が真つ赤になつて大騒ぎして

いるという報告が届いているぞ」

それを聞いてニツコリと笑う竹若。

「片想いが実らない、ひがみですか？」

「違う！ 俺はもう少し場をわかまえろと言ってるんだよ！」

社長は組んだ手を解き、拳を作つてデスクに打ちつける。だが、竹若は涼しい顔をしたままだ。「誕生日もバレンタインも一人で過ごした社長になにを言われても、ひがみにしか聞こえませんが」

「黙れ！ 自分が小向日葵君からあれこれプレゼントされたからつて、偉そうに！」

「偉そうだなんて滅相もございません。私は事実を述べたまで」

竹若はフワリと目を細め、おもむろにネクタイを直す。そのネクタイにはシルバーの土台に小さなアメジストが埋め込まれているネクタイピンが。そして、スーツの袖口にはピンとおそろいのカフスがついている。そのどちらも、恋人である小向日葵ユウカから誕生日プレゼントとして贈られた品だ。

「彼女は自分の言動に幼さを感じて恥じているようですが、私はそんな彼女が愛おしくてたまりません」

竹若は胸元を飾るネクタイピンに目を落とし、愛してやまない恋人に思いを馳せる。

「俺は社内風紀を乱しているお前に罰を与えたくてたまらない」

竹若の形のいい瞳がスツと細くなる。社長の肩が小さく跳ねた。

「な、なんだよ。上司を威嚇するな。それより、小向日葵君は大丈夫か？ いろいろ落ち込んでいたようだったが。竹若は年齢よりも大人びて見えるから、自分の外見の子供っぽさが余計気になるんだろうな」

社長の言葉に、竹若が困ったような笑みを浮かべる。

「とりあえず大丈夫ですが、油断はできませんね。彼女は変なところで思いつめてしまう性格なので」

「真面目なんだな、小向日葵君は。こんな男のために、そこまで一生懸命にならなくてもいいのに」

再び竹若の目が細くなる。

「だ、だから、威嚇すんなって。小向日葵君のことだ、自分が竹若の隣にいていいのかなんて、グルグル悩んでいたんだろ？」

竹若が小さく頷く。

「ありのままでいいと常日頃から伝えているにもかかわらず、彼女はどうしても自分の容姿に自信が持てないようでした。それと、私がこの傷を隠し続けていたことも、気に病んでいたみたいです」

竹若は長い指で左のこめかみにかかる髪を軽くかき上げた。そこには皮膚が引きつれたような痕が残っている。

「ああ、小向日葵君の大切な品を悪党どもから取り戻したときに負った傷か。気に病んでいたって、お前に怪我をさせてしまったからか？」

「もちろんそれもあるでしょうが、私が真実を告げないのは自分が本当の彼女ではないからだ、と思いついてしまったようです」

竹若は、やりきれないといった表情でため息を吐いた。

「だが、言わなかったのはお前の思いやりだろう？ その傷の話になれば、自然と小向日葵君は嫌なことを思い出すからな」

社長も渋い顔をする。明るい笑顔がトレードマークであるユウカが、「一時その笑顔を曇らせていたことを思い返し、社長は竹若同様に苦々しいため息を吐いた。

「ええ。すべてはユウカのためだったのですが、まさかそれが裏目に出るとは……」

悔しそうな竹若の表情を見て、社長はあえて明るく言った。

「まあ、そういうこともあるさ。気にすんな。愛情ゆえに隠していたんだから。な？」

「そうですね。いまだ片想いの社長とは違って、愛情を注げる相手がいるのは幸せです」

フワリと微笑む竹若。綺麗な笑顔に対して、セリフには毒があった。

「人が気を遣って慰めてやれば、なんだ、その言いぐさは」

「失礼いたしました。つい本音が」

社長はシレッと言いつ返し竹若を睨みつけるが、竹若は一切動じない。

「ユウカにはなんの憂いもなく、毎日を過ごしてほしいものです。この先も彼女に先日のような危険が及ぶのであれば、私が全力で排除してみせますよ」

竹若は社長第一秘書でもあるが、社長専属のSPでもある。その強さは折り紙つきだ。

「お前だったら、そこいらの悪党程度なら余裕だろ。だがなあ、最近はなにを考えているのかわからない奴が多いからなあ」

社長は椅子の背にもたれ、天井を見上げながらぼやく。

「厄介な世の中になったものだ。小向日葵君をつけ回していた男も、パツと見はごく普通だったんだろ？」

チラリと視線を向ける社長に、竹若は頷く。

「ええ、そうです。彼は、彼女の家の近くにあるコンビニでアルバイトをしていた大学生でした。

ああ、その節は社長にもいろいろとお世話になりました」

珍しいことに、竹若が素直に頭を下げている。彼は普段は散々、社長のことをからかっているが、時には尊敬することもあるのだ。……上司として一応は。

「気にするな。大事な部下のためなら、協力は惜しまないさ。それにしても、大学生が思いつめてストーカーになるとはねえ。花言葉に気持ちを託すなんて一見ロマンチックだが、その裏には執着心があったとわかれば逆にゾツとするな。内気な人間ほど、心の奥底に潜む狂気は計り知れないってことか」

「本当に厄介な出来事でしたよ。ただでさえユウカは悩みを抱えていたのに、それに加えてストーカーだなんて。あの輝くような笑顔は絶対に曇らせたくないのに」

深いため息を吐いた竹若の顔が痛々しい。

「竹若。お前、小向日葵君のことになると本当に人が変わったように必死になるな。まあ、それだけ状況は深刻だったってわけか。強引にお前の家に住ませなくてはならないほど」

「当然ですよ。ユウカは私にとつて、かけがえない宝物ですからね。彼女を守るためには、なりふりなど構っていません」

それを聞いた社長は、再び天井を見上げる。

「はあ、いいよなあ。恋人と一緒に暮らせるなんてよ〜」

「ですが、そう楽しいことばかりでもなかったのですよ」

「ん？」

背もたれから体を起こした社長が不思議そうに首を傾げた。竹若は軽く肩を上げる。

「時折ユウカが自分のコンプレックスを吐露することがあります。その言葉を聞いたときには愕然としましたが、胸の奥に抱えているものすべてを無理やり聞き出すわけにもいきませんし。本当に困りましたね」

「難しいもんだな、恋愛は」

社長はデスクに頬づえをつき、しみじみと呟く。

「本当ですね。ですが、どんな状況になろうとも、私はユウカを手放しません」

決意のこもった口調に、社長は苦笑した。

「はいはい。お前の溺愛<sup>てきあひ</sup>ぶりは、十分知ってるよ。本当に体を張って、小向日葵君を守ったもんな」

「あのときは、心臓が止まるかと思いましたよ。ユウカをつけ回していたあの男が、彼女にナイフを振り下ろした瞬間を思い出すと、今でも背筋がヒヤリとしますね。本当に嫌な思いをしました」  
脳裏<sup>のうり</sup>にその映像を浮かべたのか、竹若の表情が歪<sup>ゆが</sup>む。そして力なく首を横に振った。

「いえ、私のことはどうだっていいのです。彼女の笑顔を守ると誓ったのに、ユウカに恐い思いをさせてしまった自分の迂闊<sup>うかつ</sup>さを呪いましたよ」

「そんなに自分を責めるな。なにはともあれ、小向日葵君も無事だったんだからな。ほら、ハッピーエンド。ばんざーい、ばんざーい」

竹若を励<sup>ほげ</sup>まそうと、あえて明るく振る舞う社長。そんな社長を、竹若は笑顔で睨<sup>にら</sup>みつける。

「そんな単純なことではないのですよ。自分のせいで危険な目に遭<sup>あ</sup>わせてしまったと言つて、ユウカは私に別れを切り出そうとしてきたのですから。彼女はそこまで自分を追いつめていたんです。……このときは、冗談ではなく心臓が止まりましたね」

竹若が自分の左胸の辺り<sup>わたり</sup>で拳<sup>こぶし</sup>を握る。

「優しいユウカは、私に守られていることを気に病<sup>や</sup>んでいたようです。愛するユウカを守ることは、

私にとって息をするように自然なことなのですが、彼女はそこに引け目を感じていました。さらに、抱え続けたコンプレックスが爆発して、『別れる』などと……」

竹若は今にも泣き出しそうに弱々しい口調で告げ、爪が白くなるほど強く拳<sup>こぶし</sup>を握る。

「愛しいユウカが私から離れていくことを想像しただけで、絶望の闇に落とされます」

「だが実際には別れることにならなかったんだから、良かったじゃないか」

リア充爆発しろ！ と思つたかもしれない社長が苦笑を浮かべる。

「当然ですよ。なにが起きても、私はユウカと別れません。彼女は本当の私、『竹若和馬』に気づかせてくれた、かけがえのない存在なのです。ユウカがいなければ、私は生きていけません。……そのことを徹底的に教え込みましたよ。彼女の体に」

フツと口角を上げ、竹若が妖艶<sup>ようえん</sup>に微笑む。

「愛しい彼女を傷つける真似はしたくないのですが、ユウカが私から離れて行ってしまふかもしれないという焦燥<sup>しょうそう</sup>から、あのときの私は手加減ができなかったのです。私がどれほど彼女を愛しているのか、溺<sup>おぼ</sup>れているのか、嫌<sup>きら</sup>というほど教えこみました。ユウカに煽<sup>あお</sup>られた私はますます自制<sup>せいせい</sup>が利<sup>き</sup>かなくなり、ひたすら彼女を嗜<sup>せう</sup>かされたのです。あのときの嬌声<sup>きょうせい</sup>は、いまだかつてないほど艶<sup>えん</sup>めめかかった……ユウカは私がつけた所有<sup>あじ</sup>の赤い痕<sup>あと</sup>が残る体を淫<sup>みだ</sup>らに揺らめかせ、そして……」

「お、おーい、竹若！ 戻ってこい！」

このまま放つておけば何時間でも熱弁<sup>ねつべん</sup>をふるいそうな竹若に、社長が割つて入る。

「なんですか、社長」

盛り上がってきたところで話を遮られ、竹若はキョトンとする。

「『なんですか』じゃないだろうが！ お前、いつまで話すつもりだよ！」

今度こそ本気で『リア充爆発しろ！』と思っただろう社長が声を荒らげる。

「ああ、大変失礼いたしました。寂しい一人寝を余儀なくされている社長には、ユウカと私の仲睦まじい話は毒にしかありませんよね」

ニッコリと勝者の笑みを浮かべる竹若に対して、心底悔しそうにギリギリと奥歯を噛みしめる社長。

「……くそう、竹若めえ」

日本最大文具メーカーの社長室は、今日も通常運転のようです。

## 甘やかな日常

### 1 エネルギー補給は大事です

この会社に就職し、総務部広報課に配属されて間もなく一年。学生の頃、何名もの有名なジャーナリストを輩出している短大の新聞部に所属していた私、小向日葵ユウカは、その経験を買われて社内報や商品カタログ等を作る仕事を任されている。

今日も朝からばつちりと仕事をこなしたため、お昼になる頃には正直な私のお腹はグウグウと盛大な音を立てていた。

ちよんどキリのいいところまで終わったので、今から昼休みに入ることにする。

「よし、エネルギー補給しようっと」

パソコンのキーボードを打つ手を止めてデータを保存し、私はお弁当の入った紙袋を手にして立ち上がった。

「タンポポちゃん、お昼はどうする？ 今日雨が降っているから、公園には行かないでしょ？」  
声をかけてきたのは留美先輩。私と同じ総務部に所属していて、いつも私のことを気にかけてく



れる。優しいお姉ちゃんみたいな存在かな。

「三階の休憩室でお弁当を食べます。先輩は社員食堂ですか？」

「ううん。駅前にオープンしたパン屋さんでいろいろ買ってきたのよ。だからタンポポちゃんもお裾分けしようと思って」

留美先輩はそう言うと、大ぶりの紙袋を持ち上げて軽くゆすつて見せる。

私は基本的にご飯が大好きだが、パンも好きだ。いや、そばも、うどんも、パスタもお餅も好きだけどね。

「やったあ、ありがとうございます」

「じゃ、行きましようか。早くしないと、席がなくなるかも」

私の喜びように先輩はクスリと笑って歩き出す。

「そうですね」

私は先輩のあとに続いて総務部を出た。

会社の三階には大きな休憩室があり、この時間は昼食を持参した社員で賑わっている。今日は朝から雨が降っているので、いつにも増して人口密度が高い。

運よく窓際の二人席が空いているのを見つけ、私たちはそこに腰を下ろした。

先輩はテーブルの真ん中に買ってきたパンを広げる。

「さ、タンポポちゃん。遠慮なく食べなさい」

「いただきます。先輩も良かったら、お弁当のおかずをどうぞ」

「ありがとう、いただくわ」

お互いのお昼ご飯を分け合い、仕事のことや流行りの服の話などをしていたら、突然休憩室が女性のざわめきに包まれた。

「なにかしら？」

先輩が背後を振り返って、入り口に目を向ける。私も先輩にならって目を向けた。

すると、ある男性社員がこちらに向かって歩いてくるのが見える。

その男性は、ダークカラーのスーツを着こなし、爽やかな微笑を浮かべた私の恋人、和馬さんだった。

彼は自分に向けられる視線を特に気にすることなく、ゆったりと歩いてくる。

「ユウカ、ここにいたんですね」

耳に心地よい声で話しかけられ、私はコクリと頷く。

周囲の女性社員たちはそんな彼の声を耳にして、小さく「きゃあ」と黄色い声を上げている。突然の光源氏様の登場に、彼女たちは頬を赤く染め、麗しい和馬さんの笑顔を見て瞳を潤ませていた（留美先輩を除く）。

私はというと、嬉しいような恐いような、複雑な心境でドキドキ。

だって、和馬さんって人目も憚らずにスキンシップをはかってくるんだもん。

いくらこの会社が社内恋愛に寛容だとしても、彼の愛情表現は少々度を越していると思う。それに恋愛経験値が低い私は、彼についていけないことが多々あるのだ。

——今日は何事も起きませんように。

私は心の中で強く願いながら、和馬さんに話しかけた。

「あ、あの、お昼はもう食べたんですか？」

声をかけると、切れ長の目元がフンワリと弧を描く。

「はい。少し早めに取りました」

社長第一秘書の彼はとても忙しく、食事の時間もまちまちらしい。

「良かったら、座りますか？ 椅子を持ってきますよ」

「ですが、あいにく満席で、空いている椅子はないようです」

お疲れの和馬さんを労おうとすると、困ったような笑顔が返ってくる。グルッと休憩室を見回せば、確かに一つも空席がない。昼休みは始まったばかりなので、席が空くにはもうしばらく時間がかかるだろう。

どうしようかと考えていると、和馬さんは私の正面に座る留美先輩に「中村君、私に椅子を譲る気はありますか？」と尋ねた。

先輩は傍に立つ彼を見上げて――

「あるわけないじゃない。私はこれからタンポポちゃんと同じ楽しいランチなの。ね♪」

私に向かってニッコリと笑いかけてきた。

その言葉を聞き、和馬さんは形のいい目をスッと細める。はたから見れば涼やかな笑顔なのだが、私にはそれがとんでもなく恐ろしいものに思えた。

「あなたが友人と先輩の恋愛を邪魔するような、無粋な人だとは思いませんでした」

和馬さんは笑顔で先輩に声をかける。

「あなたこそ、タンポポちゃんの傍に居るのはたとえ同性でも許さない、なんて心の狭い人だとは思わなかったわ」

すると、留美先輩も笑顔で言い返す。

和馬さんにここまで話つきり言うのは、社内では留美先輩だけ。というのもこの二人は同じ大学の出身なのだ。大学に入学して、ほどなくして意気投合し、それからはなにかと行動を共にしていたという。

二人の学生時代の話は時折先輩から聞いていて、男女の性別を越えた友情は素晴らしいと思った。それにしても、初対面の和馬さんに対して、『あなたの笑顔は胡散臭い』と言いつつという留美先輩の豪胆なエピソードには驚いた。

そして、そんな留美先輩に和馬さんは『あなたの言葉は明瞭で小気味良いですね』と返したという。そんな和馬さんは懐が深いのか、感覚がおかしいのか。……いや、懐が深いんだよ、うん。

和馬さんと先輩は視線を交わして微笑みつつも、辺りにブリザードを巻き起こしている。

——恐い。二人とも恐い。

手に負えない状況にハラハラしていると、和馬さんはフツと小さく息を吐いた。

「わかりました。席は自分でなんとかします」

穏やかな声でそう告げたかと思うと、彼は私の腕を取って立たせる。

「え？」

きよんとしている間に、彼は私が座っていた椅子に腰を下ろしてしまった。そして、私の腰に腕を回してくる。

「えっ？」

再び呆気にとられていると、あつという間に力強く抱き寄せられ、私は和馬さんの膝の上に横抱きで乗せられてしまった。

「ええっ!？」

思わず声を上げる私。

ギョツとして見上げると、楽しそうに笑っている和馬さんと目が合った。

「空いている椅子はありませんし、中村君は席を譲らないと言いますし。これが一番いい解決法ではないでしょうか」

素晴らしい笑顔で言っている和馬さんに、私の顔が羞恥で赤く染まる。

「いやいやいや、おかしいでしょう！ 席がないから、膝に抱っこして！ ちょ、ちょっと、留美先輩、なんとか言ってくださいよ！」

向かいにいる先輩に助けを求めるが、「竹若君が素直に私の言うことなんか聞くわけないじゃない」と返される。

——恋人である私の言うことも聞いてくれないんですけど……

周りにいる社員さんたちが、膝の上に抱き上げられている私をチラチラと窺っているのがわかる。恥ずかしくて顔を上げられない。

耳に、周囲のざわめきが届く。「タンポポちゃんが羨ましいわあ」という女性社員の声。「俺だつて、タンポポちゃんを抱っこして癒されたい」という男性社員の声。えっ、私、抱っこ人形じゃないんですけど……

和馬さんは、顔を引きつらせている私の口元にお弁当の唐揚げを差し出す。

「はい、ユウカ。口を開けてください」

「自分で食べますから！」

顔を真っ赤にして叫ぶ私に構わず、彼はニコニコと唐揚げを唇に押し当ててくる。

「遠慮など不要ですよ。さあ」

切れ長の目がスウツと細くなった。いつもの反論を許さない笑みだ。彼がこの表情になると、私にはどうすることもできない。

「……はじ」

おずおずと口を開いて、素直に唐揚げを食べる。モグモグと口を動かす私を、ジッと見つめる和馬さん。

「可愛い口ですね。私もユウカに食べられたいです」

彼は艶のある声でうっとり囁いた。

「なにを言っているんですか!？」

口を開いた途端、今度はだし巻き玉子が入られる。一口では入りきらない大きさだったので、適当なところで噛み千切ると、和馬さんはその残りを迷うことなく自分の口に運ぶ。一つの卵焼きを二人で分け合って食べるって——!!

真っ赤な顔で必死に咀嚼し、ゴクン、と呑みこんでから彼に言い放つ。

「和馬さん、やめてください!! もう私、恥ずかしさに耐え切れません! 留美先輩、助けて!」

留美先輩に向かって手を伸ばすも、和馬さんに絡め取られる。

「ユウカ。恋人の私の前で、他人の名前を呼ぶなんて酷いです」  
公衆の面前で羞恥プレイを炸裂させてくる和馬さんのほうが酷いと思う。人前じゃなかったら私だってここまで大騒ぎしない。だけど、今は社員さんたちが周りにいるんだってば!

ムウツと唇を尖らせて膨れると……

「ああ。怒ったあなたも、なんて可愛いのでしょうか」

と、和馬さんはいっそう頬を緩ませ、私のおでこや<sup>まぶた</sup>瞼にチュツ、チュツとキスをしてくる。

「や、やめてください!」

「照れるあなたも可愛いですよ」

和馬さんは箸を置いたかと思うと、私を両腕でギュツと抱きしめ、真っ赤に染まった頬に遠慮なく唇を寄せた。

なんとか身を振ろうとすれば、さらに強い力で抱き寄せられ、顔を背けようとすれば、大きな手の平で頬を包まれる。

「せ、せ、先輩!!」

目の前でいちやつく(?) 私たちに顔色を変えることなく、黙々とパンを食べ進めている留美先輩。そんな先輩が、真面目な声でこう言った。

「このクリームパン、美味しいわよ」

「今はそれどころじゃないんです!!」

喚く私に構わず、和馬さんがそのクリームパンに手を伸ばす。

「まあ、そう言わずに。せっかく中村君がすすめてくださったのですから」

誰のせいで私がこんなに大騒ぎしているのか、わかっているのだろうか。我が道を爆走中の彼氏は、クリームパンを笑顔で差し出してくる。

その余裕のある表情にちよっとだけカチンときたが、美味しそうなクリームパンの誘惑には勝て

ず、私は「うーっ……」と呻き、大きな口を開けてパクリ。思い切りかじりついたので、唇の端にカスタードクリームがついてしまった。

それを見た彼の瞳が妖しく光る。

「ユウカ、クリームを取ってあげますね」

艶のある声でそう囁いたかと思うと、和馬さんは顔を近づけて唇の端のクリームをペロリと舐め取った。

「ひゃっ」

——な、舐めた！ 今、この人、舐めたよ！

これ以上ないほど顔を赤く染めて硬直している私に、和馬さんは「まだついていきますね」と言っ  
て、再び舌を伸ばしてくる。

少しあたたかくてざらついた感触が、唇の上をゆっくりと動く。そして、最後に舌ではなく唇を軽く押し当ててきた。驚きに目を見開いている私の眼前には、うっとりとした表情の和馬さんが……

は、は、は、恥ずかしい……！

お弁当と美味しいパンでエネルギー補給できるはずだったのに、私は燃え尽き、すっからかんになってしまった。

最後にチュッと可愛らしい音を立てて、和馬さんの唇は離れていった。時間にしたらごくわずか

かもしれないが、私が感じた羞恥心は膨大だ。

彼の腕の中から逃げ出せないと悟った私は、抱っこされたまま唸っていた。ちなみに、留美先輩は一足先に総務部へ戻っている。休憩室にいた他の社員も、食事を終えるとそそくさと自分の部署に帰っていったようだ。

「うう、和馬さんのバカア」

目の前で清々しく笑っている彼の顔をグーで殴る。もちろん本気じゃないけどね。

私の照れ隠しを笑顔で受け止める和馬さん。そんな彼の表情に疲れが浮かんでいることに、今さらながら気がついた。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

私が言いたいことを察したらしい和馬さんは、困ったように小さく笑う。

「厄介な案件が立て込みましたので、少々疲れているかもしれませんが、心配していただくほどのことありませんよ」

「社長秘書って、なんだかいつも忙しそうですもんね。予定外の仕事も多いみたいですし」

私の言葉に、和馬さんがクスリと笑みを零した。

「ユウカからエネルギーを貰いましたので、すぐ元気になりますよ」

——その補給方法は、先ほどのキスでしょうか。

「そ、そうですか」

ポフツと音が出そうなほど顔が熱くなる。

それはともかく、和馬さんの体調が心配だ。

「もし良かったら、あとで栄養ドリンクを差し入れしましょうか？」

和馬さんはゆつくりと首を振った。

「いえ、大丈夫です。ここにありませんから」

そう言っつて、彼は上着のポケットから栄養ドリンクの瓶を取り出す。そしてキャップを捻って、一息にドリンクを飲んだ。

「これで午後の仕事も頑張れそうです。……もちろん、ドリンクよりもあなたのおかげですよ。可愛いユウカ、愛してます」

和馬さんの優しい微笑みに、密かに私のエネルギーも補充されたのだった。

↳その頃の社長室↳

会議や書類のチェックをはじめとして、社長は仕事に追われまくっていた。

まだ三十代前半なので体力に自信はあるが、こうも立て続けに予定外の業務が飛び込んでくると、体力よりも精神力が奪われていくものである。

先ほど昼食を取ったが、打ち合わせをしながらであったため、体も心もさほど休まっていなかった。

「はあ、久々に疲れたって感じだなあ」

大きな椅子にグツタリともたれ、深いため息を吐く。

この社長は自ら動くタイプの経営者であるため、場合によっては社内の誰よりも仕事をこなす。だからだろうか、社内一と名高い美貌が陰っているように見えるのは。

もう一度、社長は深いため息を吐く。

「……こうなったら、奥の手を出すか」

そうポツリと呟くとおもむろに立ち上がり、奥にある簡易キッチンへ向かった。

冷蔵庫に歩み寄り、扉の取っ手に手を掛ける。

「ふふふ、俺には強い味方があるのだー！」

説明しよう。

社長が言う強い味方とは、長い間想いを寄せている女性社員から差し入れてもらった栄養ドリンクのことである。

告白はできないくせに、なにかとその女性社員と接触を図り続けている社長。ヘタレなのか勇氣があるのかわからない。

社長はつい先日、彼女がドラッグストアで買い物をしているのを帰宅途中に目撃した。

思い切っつて声をかけたものの、興奮のあまり支離滅裂な話題ばかりを投げかけてしまった。する

と、彼女がそつと栄養ドリンクを差し出ししてきたのだ。

『お疲れ様です。よろしかったら、こちらをどうぞ。では、私はこれで失礼いたします』

察するに、女性社員は社長との会話を打ち切るために、そのドリンクを差し出したものと思われる。そうとは気づかない、恋の病の重症患者である社長。

「仕事で疲れている俺を気遣ってくれたのか！ ああ、なんて優しいんだ！」

ドラッグストアの店内で栄養ドリンクを握りしめ、社長は歓喜に打ち震える。怪しい、あまりに怪しい。通報される前にさっさと立ち去るべきだ。

幸いにも通報されることなく、社長はその栄養ドリンクを手に無事帰宅。

貴重な差し入れ（と思っっているのは彼だけ）をすぐさま飲み干してしまうことなどとてもできず、彼はそのドリンクを会社に持っていき、社長室の冷蔵庫に保存していたのだった。

「今こそ！ 今こそ！ この栄養ドリンクで癒されるのだー！ー！ー！」

グワツと冷蔵庫を開ける社長。

ところが……

「……………ん？」

お目当ての栄養ドリンクがない。

「え？」

社長は目を大きく見開いて固まる。

「昨日までは、確かにあったよな……」

忽然と姿を消した、愛しい人から差し入れてもらった（と勘違いしている）栄養ドリンク。

「な、なんで!? 俺の栄養ドリンク、どこ行ったー！ー！ー！」

くしくも竹若が栄養ドリンクを飲みこんだのと時を同じくして、社長の絶叫が響きわたったのだった。

## 2 アツアツな二人？

三月に入り、暖かい日が増えてきた。

カイロを持ち歩くことはなくなったものの、今日のように北風が強く吹きつける日は、寒がりな私は思わず身を縮めてしまう。

「うう、寒かったあ」

お使いを済ませて総務部に戻ってきた私は、自分の席の下に置いてある小さな電気カーペットのスイッチをオンにした。そしてパンプスを脱いで、マットの上に立つ。

すると足の裏からジンワリと熱が伝わってきて、私は思わずホウと息を吐いた。

「はあ、あつたかあい」

しみみ眩くと、小さな笑い声が聞こえてきた。

「相変わらず、タンポポちゃんも寒がりね」

書類の束なはを手にしている留美先輩が、苦笑いをしながら私に声をかけてくる。

「そんなに外は寒かった？」

「日差しがあつたので、上着を持たずに出かけたのが失敗でしたよ。いきなり北風が強くなるなんて……。しかも天気予報を信じて、今日は薄手のストッキングにしたから、足の先がとにかく冷たくって」

北風さえ吹かなければ、春の日差しを楽しめたのに。

またしても、天気予報のお姉さんにやられてしまった。あくまでも『予報』だとはわかっているけれど、なんだか悔しい。

ムウツと唇を尖とがらせると、先輩はまた苦笑する。

「室内にいるから、風向きが変わったことに気づかなかつたわ。寒がりなタンポポちゃんには、大変だったわね」

かじかんだ手を擦こすり合わせていると、先輩がポンポンと頭を叩いてくる。華奢きゃしゃな指先は、私のもと違ってあたたかい。

「そういえば、先輩ってあんまり寒がらないですよ。代謝がいいんですか？」

代謝がいい人は脂肪がつきにくいと聞いたことがある。だから先輩は、たくさん食べても太らないのかもしれない。

なんとも憎たらしい、いや、羨うらやましい体質だと思いつつ留美先輩を見上げていると、

「そうねえ。寒くて困ったことは、あまりないかも。でも、冷たくなるところはあるのよ」と、返ってくる。

足の先とか、鼻とか頬ほだろうか。

人によっては、腰の冷えがツライともいう。もし先輩がそうであれば、通販で手に入れた遠赤外線薄型腹巻はくまきを進呈しんせいしよう。

そんなことを考えながら、

「どこですか？」

と尋ねれば、ニコツと微笑まれた。

「ふふっ、胸よ」

「は？」

思ってもみなかつた答えにキョトンとしていると、先輩はヒョイと肩を上げる。

「脂肪って意外と冷えるのよ。私の場合、幸か不幸か胸がそこそこあるから、そういう苦労があるの。冬場もそうだけど、夏の冷房でも結構冷えるのよねえ」



「へえ、そうだったんですか」

胸が大きい人は、そういう苦労があるのか。

「それはそれで、大変そうですね」

殊勝な気持ちで、そう言葉を返す。すると留美先輩は、「タンポポちゃんは、真つ先にココが冷えそうね」と言っ、私のお腹を指先でムニツと摘んだのだった。

「留美先輩めえ！ 自分がスタイルいいからって！」

時間が合えば、終業後は和馬さんと一緒に帰ることにしている。私は誰もいなくなった総務部で、プリプリしながらウエストを絞るエクササイズに励んでいた。

「こうなったら、先輩がビックリするぐらいスタイル良くなってやる！ よし、今夜からダイエツトだ！ エクササイズも一日一時間！」

ブンブンとウエストを捻っている、後ろからフワリと抱きしめられた。

「あなたは今のままで十分ですよ」

「ふえ!? か、和馬さん！」

驚いて振り返った瞬間、私は和馬さんの逞しい腕の中に収まった。

「なにやら運動に励んでいるようですが、私には今のあなたのままでも十分魅力的に映りますよ」シトラス系のコロンの香りに包まれ、ドキンと心臓が跳ね上がった。

胸の高鳴りを感じつつ、私は静かに深呼吸を繰り返す。

息が整ってきたところで、和馬さんは私の肩に手をかけてクルリと方向転換させた。

目の前に彼の顔が迫ってきたと思ったら、いきなりチュツとキスされる。

わずかに触れるだけの、掠め取るようなキス。それでも私の心臓は忙しく脈を打ってしまふ。

「え、あつ」

カアツと顔を赤らめると、和馬さんは穏やかな表情で目を細めた。その表情がこれまた艶っぽくて、直視することができなくなる。

私はアウアウと意味不明な言葉を発しながら、真つ赤な顔を隠すために俯いた。

「また恥ずかしくて……。可愛いですね、ユウカは」

私の髪に頬ずりをした和馬さんは、

「健康になるために運動をしたり食事療法をすることは、とてもいいことだと思えます。ですが痩せるといふ目的のためでしたら、今のあなたには必要ないかと」と、静かに告げる。

「これはあくまでも主観なのですが、今の若い女性たちは痩せすぎのように思います。女性というのはやわらかな体のラインが魅力ですよ。今のユウカは、本当に魅力的です」

「そうは言っても、顔はちよつと丸いし、お腹もなんというか……」

自分としてもそれほど無駄なお肉があるとは思わないが、もう少しぐびれがあったら、と考える

ことはある。

「ただ、和馬さんはクスツと優しく微笑む。

「顔もお腹も、とても愛らしいですよ」

「でも……」

そう言ってくれるのは嬉しいけれど、素直には領けない。

私だって『いいオンナ』になりたいのだ。そんな思いを、敏い和馬さんは的確に汲み取ってくれる。そうですね。スタイルアップを望むあなたの向上心は、とても素晴らしいです。では、無理のない範囲でできる運動を二人で探しましょうね」

「二人で？」

和馬さんは普段から運動をしているんだし、私に付き合う必要などない。首を傾げる私を見て、彼はフワリと目を細めた。

「ええ、そうですよ。一人よりも二人でやったほうが、続けられそうではないですか。ユウカの場合、一人で頑張ると根を詰め過ぎてしまうでしょうから。なので、私と一緒に楽しみながら運動したほうがいいと思うんです」

「ああ。確かにそうかもしれません」

一人で黙々とやると加減がわからなくて、すぐに無理が重なるだろう。そうなれば結局挫折してしまう。

それに日頃から鍛錬して見事なスタイルを保持している和馬さんに指導してもらえば、私だって留美先輩が腰を抜かすほどのナイスバディーになれるかもしれない。

総務部を出て駐車場に向かいながら、夕飯はどうしようかという話をして、今日は和馬さんの家で鍋料理を作って食べることにした。

鍋だったら材料を切つてスープで煮込むだけだから、そんなに手間はかからない。熱いうちに食べれば、冷えた体も温まる。

それに野菜や豆腐をたくさん食べるようにすれば、カロリーだって気にならないしね。うん、今の私にもってこいだ。

和馬さんのマンションに行く前に、スーパーに寄って買い物をする。和馬さんは左手で買い物カゴを持ち、私に寄り添う。

「和馬さん、鍋は何味にしますか？」

野菜コーナーへ向かいながら彼を見上げて尋ねると、

「あなたにお任せします。ユウカが作つてくださる料理はなんでも美味しいですから」

と、やわらかい笑みと共に告げられた。

その笑顔に、私の心臓がドキンと大きく跳ねる。

顔がいい人は、ちよつと微笑むだけで凄まじい破壊力を発揮するのだ。

和馬さんとは、キスだってしたこともある。もちろん、それ以上の行為だって。

なのに、私はいまだに彼の微笑み一つでドキドキしてしまう。

——いつになったら、慣れるんだろう。

自分の彼氏ながら、つい見惚れてしまう。

こんな調子では、慣れる日など一生やってこないかもしれない。

——ま、いつまでも恋人にときめいていられるって素敵なことだよね。

些細なことでも胸が高鳴ってしまうのはちょっとびり先が思いやられるけど、それは幸せなことなのかもしれない。

——それより、和馬さんに飽きられないように努力しなくては。

そのためにも少しでもスタイルを良くして、和馬さんの隣に堂々と並ぶ！……それは無理でも、せめて年相応の女性に見られるようにならねば！ 脱・幼児体型！

決意を新たにグッと拳を握り、私は軽く深呼吸をして、はやる心臓を落ち着かせる。

「じゃあ、シメは雑炊がいいですか？ うどんがいいですか？ それとも、ラーメン？」

具を食べたあとの鍋には、ダシの利いたスープが残る。それを捨ててしまうのはもったいないから、私はいつもそのスープを使ってシメの料理を作るのだ。

それを聞いた和馬さんは、ちよつとだけ困ったように笑った。

「カロリーのことを考えると、炭水化物の摂取はできる限り控えたほうがいいかもしれません。私

としては、今のままのユウカが大好きですので構わないのですが」

「あっ」

彼に言われてハツとする。

それほどたくさん食べている自覚はないのに、私がなかなか痩せないのは、きっとこういうところに原因があるのだろう。

そういうえば食事にちよつと気を配るだけで体重は簡単にコントロールできるって、留美先輩も言っていた。

わかっていたけれど、鍋の最後に食べる雑炊やうどん、ラーメンはすごく美味しくて、ついついやめられなかったのだ。

「炭水化物って、摂りすぎると脂肪になるんですよ。鍋をしたときってシメを食べずにはいられない……でも、それじゃいけないですよ。今日は、諦めます」

——ダメじゃん、私！ たった今、痩せるって誓ったばかりじゃん！

つくづく自分は食いしん坊なのだなど、苦笑する。

すると和馬さんはカゴを持っていないほうの手を伸ばして、私の髪をサラリと撫でてきた。

「でしたら、白滝を多めに入れて麺代わりに食べるといいはいかがですか？ ご飯と違って、カロリーはありませんから」

和馬さんが絶妙のアドバイスをくれた。

普段は具の一つとしてしか考えていなかったけれど、味が染みた白滝しらたきはきつと美味しいはずだ。私は和馬さんにペコリと頭を下げた。

「そうします。和馬さん、ありがとうございます」

「いえ、お礼を言われるほどのことでは。私はユウカが美味しそうに食事をしているところを見るのも大好きなのですよ。無理に食事制限をすると、ストレスになって、私の大好きな表情が見られなくなってしまう。それは寂しいですからね」

彼はそう言っただけで、赤くなつた顔を隠すために少し俯うつむく。

「再びドキドキしてしまい、赤くなつた顔を隠すために少し俯うつむく。」

「どうしました？」

「あ、いえ、別に……」

下を向いた状態でフルフルと首を横に振れば、クスリと小さな笑い声が降ってきた。

「相変わらず、ユウカは可愛いですね」

「えっ？ な、なにを言っているんですか。私が可愛いなんて、そんなのっ」

照れくさくなつて、床を見つめたまま財布をギョツと握りしめる。

——笑顔もそうだけど、何気なく言われるセリフも破壊力バツグンだよおおお！

アワアワしている私に、和馬さんはさらに追い打ちをかける。

「真っ赤になつて、俯うつむいて……おや、うなじまで赤くなっていますよ。私の言葉に照れてしまうユ

ウカは、なんと愛らしいのでしょう」

とつさに首の後ろへ手をやるが、もう遅い。

「今さら隠しても仕方がないというのに、その慌てた様子が大変可愛いですね。……ですから、キスしてもいいですか？」

「はあっ!？」

突拍子のないことを言われ、驚いた私はガバツと顔を上げる。視線の先には笑顔の和馬さん。

彼は軽く首を傾かしげると、私に片手を伸ばしてきた。そして顎先あごさきを捉とらえ、クイツと私の顔を上げる。

「いいですよね？」

切れ長の目を細め、和馬さんが徐々に上体を倒してくる。

ゆっくりと近づいてくる綺麗な顔を凝視しながら、私は、

「……………いいわけ、あるか——!」

と、叫んだのだった。

なんとかキスは回避できたけど……

スーパ―は夕方のピーク時ほどお客さんはいない。それでも全くの無人ではないのだ。

——それなのに、それなのにキスしようとするなんて!!

本当にキスをされていたら、奇声を発し、卒倒そつどうしていたに違いない。恋愛経験値の低いお子様を

悔るな！……って、大きな声で言えたことじゃないけどさ。

「そういうところをちよっと直してくれたらいいのに」

白菜を手にブツブツと咬いていると、

「仕方ないではありませんか。ユウカがあまりに可愛いので、思わずキスをしたくなったのですよ」と和馬さんは言う。

仕方がないとか、思わずなんて理由で許されるものではない。公衆の面前で、しかも野菜売り場の真ん中でキスをするなんて、非常識にもほどがある。

少しばかりムウツと頬を膨らませて彼を睨めば、さすがの彼も気ますくなくなったようだ。

「ですが、人目のあるところで不用意にキスするのは、やはり良くないですよね」

なにやら反省した物言いだ。

——良かった。和馬さん、ちゃんとわかってくれた。

私は安堵して、ホッと息を吐く。

「そうですね。良くないですよ」

瑞々しい白菜を和馬さんの持つカゴに入れ、苦笑まじりに彼を見上げた。

「私のキスで蕩けているユウカを他の男性の目に触れさせるなんて、絶対に避けなくては。あの愛らしい顔のあなたを見ていいのは、私だけなのですから」

きつぱりと言つてのける和馬さんに絶句する。

——気にするところは、そこなのか!? 公共の場におけるマナーとか、そういうことじゃないの!?

思考が斜め上の我が彼氏様に、私は開いた口が塞がらなかった。

なにはともあれ、そのあとの買い物は和やかな雰囲気に進んでいった。

「白菜と長ネギ、春菊でしょ。あと、花形に切った人参を入れたら彩りもきれいですよね」

「見た目にも美味しそうですし、栄養のバランスも良くなりますね。ああ、ユウカ。エノキとシイタケでしたら、どちらを入れますか?」

「んー、そうですねえ。鶏ダシの塩味にしますので、エノキのほうが合うと思います。それに、私はシイタケがあまり好きではないので……」

好き嫌いをするなんて子供っぽいと笑われるのではと思ったけれど、和馬さんはフワツと優しく微笑んだ。

「それは知りませんでした。今夜は新しいユウカを発見できて、とても嬉しいです。こうやって一緒に買い物をするというのは、あなたの新たな一面を知る機会にもなりますね。これからも時々、一緒に買い物に来ましよう」

そう言つて、大きな手で私の頭を撫でる。

「はい」

嬉しくなった私は大きく頷いた。

和馬さんはごく自然に私のことを受け入れてくれる。そんな彼の言動は、私にとってすごく安心できるものなのだ。

これまで私は自分の容姿や性格に対して、否定的に考えてしまっていたから。

小柄で童顔で性格も幼い私は、同じ年代の周りの女性に対して、すごく、すごく引け目を感じていた。

だけど和馬さんとお付き合いをはじめてから、『今の私でもいいんだ』って少しずつ思えるようになってきた。

些細なこともかもしれないけれど、今まで後ろ向きだった自分が前向きになるって、とつても大きな変化だと思う。

そんな優しい和馬さんとお付き合いできることに、改めて幸せを感じる。彼の存在に、深く感謝したい。

心もち彼に寄り添って立ち、私は財布を持っていないほうの手で和馬さんの手をキュッと握った。赤くなっている顔を自覚しつつ、和馬さんに声をかける。

「和馬さんも、好き嫌いがあつたら教えてくださいね。和馬さんのこと、私ももっと知りたいです」少し照れながらそう言うと、和馬さんは笑顔を返してくれる。

「ええ、お互いにいろいろと知っていきましようね」

優しい和馬さん。

大好きな和馬さん。

彼がいつまでも、いつまでも穏やかに微笑んでくれたらいいなど、私は繋いだ手に願いをこめた。

そのあと、食後のデザートはどうしようかと考えていると、和馬さんは『ケーキやプリンなどは控え、果物にしましょう』と提案してきた。

カロリーを抑えられる上にビタミンを摂取できると言うので、私は彼の提案に大賛成。特に苺はビタミンCが豊富で、風邪予防にもなるらしい。和馬さんは物知りだ。

そんなわけで、果物コーナーに向かったのだが……

「だから、そういうふざけたことはいちいち言わなくていいんです！」

手に取った苺のパックを持ったまま、私はプリプリしながら足を進める。

和馬さんは長い足を優雅に動かして、先を歩く私に簡単に追いついた。そして私を静かに抱き寄せて、耳元で囁いてくる。

「ふざけたこととはなんですか。私はありのままを正直に言っただけですよ。『この艶やかで真っ赤な苺は、私に何度もキスをされて色づいたユウカの唇と同じですね』というセリフのどこがふざけているのですか？」

ものすごく真面目に言われ、さらに恥ずかしさが増していく。

「ああ、もう、改めて言わなくていいですから！」

クルツと振り向き、膨れた顔で和馬さんを見上げれば、

「すみませんでした。キスをされて色づいた唇ではなく、私に抱かれて恥ずかしさと快感で赤く染まった頬のようだと言うべきでしたね。この苺は、まるでベッドの中のユウカそのものです。言葉を間違えまして、本当にすみません」

と、言って真剣に反省している。

——だーからー！ー！ いちいち言うなつてばー！ー！ー！ つていうか、反省するところはそこなの！？

私が口をパクパクしているうちに、和馬さんは私の手から苺のバックを取り上げてカゴに入れた。「買い物はこれで終わりですね。では、帰りましょう。早く二人きりになって、あなたにキスがしたいです」

ニッコリ笑った和馬さんは私の頬をスルリと撫で、私の手を引いてレジへと向かう。

彼とは対照的に、私は恥ずかしさで顔を上げられず、繋がれた手を頼りに歩いた。

店内で何度となく繰り返された恥ずかしいセリフは、私にだけ聞こえるくらいの小さな声だった。だから周囲の人たちは、かっこいい彼を目にして、ただ単に見惚れている。

——和馬さんが変なことを言わなければ、私だつてうっとりしているだけですむんだよ……

いかんせん、彼の口から飛び出す言葉はどうにもただけなことが多い。

どうして『キス』とか、『ベッドの中』なんて平気で口にできるのだろうか。

——和馬さんつて、元々こういう人なのかなあ。

こちらが恥ずかしくなるセリフは当然のことながら、『可愛い』や『愛している』という言葉もサラリと口にする和馬さん。

入社して、はじめて顔を合わせたときからずっと和馬さんはこんな調子だった気がする。

——そのうち留美先輩に、和馬さんの大学時代の話を詳しく聞いてみようかな。

こんなにもかっこよくて優しくて頼りになる人に、彼女がいなかったとは思えない。周りの女性が放っておかなかつただろう。

——前の彼女さんつて、どんな感じの人なんだろう。私と同じような人かな？ それとも……

『私とは全く違う、美人で大人っぽい人？』

というフレーズが一瞬心に浮かんだけれど、すぐさま打ち消した。

——こんなことばっかり考えたらだめだね。いけない、いけない。

和馬さんと付き合いはじめた頃に比べたら、自分を卑下することはだいぶ少なくなった。でも、本当に時々なのだけれど、コンプレックスを抱えた自分が出てくることがあるのだ。

和馬さんに何度『ありのままの、今のままのユウカでいいのですよ』と言われても、そう簡単にこれまで自分が抱えてきた感情をなかつたことにはできない。

他の人たちはどうなのだろう。

好きな人と恋人同士になれた人は、誰もかれも幸福感しか抱いていないのだろうか。不安に思ったり、悩んだりほしくないのだろうか。

——好きな人がそばにいるのにこんなことを考えちゃうなんて、私はまだまだお子様ってこと？ 支払いを終えた物を買い物袋に詰めながら、ふと、そんなことを思う。そして、大きなガラス窓に映る私たちの姿が目に入った。

スタイルが良くて、顔立ちも整っていて。立ち居振る舞いが優雅で、些細な仕事もかっこよくて。笑顔が優しくて、口調が穏やかで、滅多なことでは取り乱さない、素敵な大人の男性の代表のような和馬さん。

それに比べて、私は彼とは真逆だ。見た目も中身も和馬さんとは正反對なのだ。自分のことを改めて考えると、ガラス窓に映る私たちの姿から目を離せなくなる。

アンバランスな二人が並んでいる姿に、チクチクと胸が痛む。

——私、和馬さんの彼女でいていいんだよね？

映り込んだ彼をジッと見つめていたら、ガラスの中で目が合った。そして次の瞬間、彼はフワッと笑った。

その笑顔は本当に優しく、私のことを好きってことがありありと伝わってくる。

そんな彼の様子にくすぐったくなって、次に胸があたたかくなって、痛みがゆつくりと消えていった。

いつだったかショーウィンドウに映った私と和馬さんの姿を見たとき、つらくて苦しくて泣き出したくなった。こんな自分、和馬さんにはちつともふさわしくないと思った。

だけど、今は悲しくない。

まったく平気というわけじゃない。コンプレックスはまだ感じるけれど、泣きたいほどに悲しいとは思わなくなった。

——いろいろところがデコボコな私と和馬さんだけさ。それはそれでいいのかも？ だって和馬さん、すごく嬉しそうに笑ってるもん。

私はガラスの中の和馬さんにそっと笑いかけたのだった。

買い物を終え、和馬さんの車に乗り込む。

単に買い物をしただけなのに、私はなんだか楽しかった。

上機嫌で助手席に収まり、シートベルトをしめる。そしていつもと同じように見事な手さばぎでハンドルを操る和馬さんをチラリと窺った。

彼を横目で見ながら、後部座席に置いた買い物袋が道を曲がるたびにカサリと音を立てるのを聞



く。その音を耳にして、私はまた楽しくなってきた。

私は『好きな人と一緒にいられる』ということが嬉しかったのだ。……顔から火が噴き出すほど恥ずかしい思いはしたけれど。

これまで、和馬さんと二人きりで過ごした時間がないわけじゃない。

デートの日には朝から晩まで。ときには一晩中一緒にいたことも。もちろんそういった時間も、すごく楽しかったし、幸せだった。

だけど、『一人で買い物』という何気ない時間もまた、違う幸せを感じるのだ。

そんな些細なことを嬉しいと思ってしまう自分は、なんてお手軽なのだろうか。

そうは思うものの、好きになった人が自分を好きになってくれて、自分と同じ時間を過ごしてくれることって、実はものすごく貴重なことなんじゃないかなって思う。

お互いの日常の中に自然とお互いの存在があることは、とつてもとつても幸せなことなんじゃないかって気がしてくるのだ。

そう考えたら、また嬉しくなってしまう。

「一緒に献立を決めたり、一緒に買い物したり。なんだか新婚さんみたい」

嬉しさのあまり、普段では言わないようなセリフがつい口から零れた。独り言のつもりで小さな声で言ったのに、和馬さんには聞こえたらしい。

「ユウカは可愛いことを言いますね」

和馬さんがクスリと笑った。

「あつ。き、聞こえちゃいましたか」

勝手に一人で盛り上がっていて恥ずかしい。

私は和馬さんから視線を外して、赤くなった自分の顔を伏せた。すると彼が左手を伸ばして私の髪を優しく撫でてくる。

「いずれは『新婚さんみたい』ではなく、真正正銘『新婚』になりますよ」

大きな手がゆつくりと愛おしそうに私の髪を撫でる。そのセリフに、私の顔はまたさらに赤くなつた。

「え、えと、その……」

膝の上に置いていた手でスカートの裾を掴み、モジモジとする。

この先どうなるかなんてわからないけれど、和馬さんが私との付き合いを一時的なものではないと考えてくれていることが嬉しい。

付き合いはじめたばかりだから、彼との結婚を具体的に考えたことはない。

それでも、私とずっと一緒にいたいと思ってくれている彼の言葉が嬉しくてたまらない。

「私もい、いつか……、なんといえますか、ええと、そうになったら、いいな……と、お、思い、ます……」

真っ赤に染まった顔を上げることができなかつたけれど、つつかえつつかえ言葉を紡いで、自分

の気持ち伝える。

そんな私の肩を和馬さんはグツと抱き寄せ、信号待ちなのをいいことに、こめかみへチュツとキスをしてきた。

「ユウカ、やはりあなたは私を喜ばせる天才ですよ。その言葉一つで私がどれほどの幸福を感じているのか、この胸を切り開いて見せてあげたいです」

うっとりとした彼の口調に、私の顔はいっそう赤く熱くなる。

「あ、や……、そんな大したことは言っていないですけど……」

すると、和馬さんが『いいことを思いついた』とでも言わんばかりに目を輝かせた。

「ああ。家に帰る前に役所に寄って婚姻届を提出すれば、今すぐに夫婦になれますね。ぜひ、そうしましょう」

信号が青に変わった途端、和馬さんは彼のマンションの方向とは違う方向へとハンドルを切ろうとする。

私は慌てて和馬さんに制止の声をかけた。

「そんな！ やめてください！ 今すぐとか、意味がわからないんですけど！」

「わからないほど難しいことは言っていないのですが。まあ、いいです。わからないのでしたら、実際に入籍をして実感していただきましょうか」

ニッコリと、それはもう綺麗に微笑む和馬さんの表情を見て、私はブンブンと首を横に振る。

「ご、ご、ごめんなさい！ わかりました、もう、わかりました！ だけど、今すぐの入籍は勘弁してください……！」

和馬さんのことは大好きだけど、それは早すぎる。

恋愛経験値の低い私なので、もう少しゆっくり進んでほしいのだ。今すぐに入籍なんてしたら、頭と心臓が破裂してもおかしくない。

必死に訴える私に、彼はやれやれと息を吐いた。

「わかりました。今日のところは役所に向くのはやめておいてあげましょう」

そう言っつて、マンションへ向かう道へと車を進める和馬さん。

『今日のところは』という言葉が非常に気になるけれど、とりあえず、私の心臓と頭は無事で済みそう。そう思っつて、私は胸を撫で下ろしたのだった。

車の中はあたたかかったけれど、夕方からいつそう北風が強くなったせいで、彼の部屋に辿り着くまでにすっかり体が冷え切つてしまった。

そう言っつて和馬さんは、ブルブルと震えている私を気遣つてくれる。

「コーヒーを淹れますので、あたたかいカフェオレを作りましょうね」

和馬さんがコーヒーを淹れている間に、私は小さな鍋でカフェオレ用の牛乳を温めた。

いい香りを放っているコーヒーに熱々の牛乳を注いで、大好きなカフェオレにする。それを持つ

て、リビングのソファへと移動。

そのあと和馬さんが自分用のコーヒーを手に持ち、私の隣に腰を下ろす。

うっかりいつもより熱めに牛乳をあたたためてしまったので、私はマグカップに何度も息を吹きかけてカフェオレを冷ます。

フウフウと息を吹きかけていると、横からやたら熱心な視線を向けられていることに気づいた。

和馬さんはジツと私を、というよりも、私の口元を見つめていた。

あまりにも真剣に見つめられているので、居心地が悪い。

「あ、あの……。なんででしょうか？」

和馬さんに声をかけると、形のいい目元がスツと細くなった。

「そうやって唇を尖らせているユウカを見ると、キスを誘われているように思えますね」

「ふっ」

思わず噴き出してしまった。

なんだってこの人は、いつもそういう思考に持っていくのだろう。いつまで経っても、私は彼の言動に慣れない。

いや、慣れてしまったら、人として大事ななにかを無くしてしまう気がするので、慣れる必要はないだろう。

私はマグカップを前のローテーブルに置いて、軽く咳ばらいをしたあと和馬さんに体を向けた。

「熱いものを冷ますのに『ひー』とか『へー』じゃ、口が横に広がって息を吹きかけられないじゃないですか。『ふー』とするのが一番自然ですから、唇が尖るのは当然ですよ」

まともに取り合って恥ずかしがると、『照れるユウカは可愛いですね』などと言って彼が暴走するので、ここは努めて冷静に対応する。

すると和馬さんは、

「今まで特に考えたことはありませんでしたが、言われてみると確かにそうですね」

と、小さく頷いている。どうやら、和馬さんの思考回路はピンク色に染まらずに済んだようだ。

しかし、彼は私の予想を上回る人であることには変わらない。

「私はユウカに熱を上げています。こんな私を冷ましてください」

そう言うと、彼は逞しい腕でグツと私を抱きしめた。

「か、かず……っ！」

彼の名前を呼び終える前に、押し倒されてしまった。背中がソファの座面に触れた瞬間、和馬さんはガツチリ上から体重をかけてくる。

大きな体と長い腕で拘束され、私は身動き一つ取れない。往生際悪く足をはたつかせてもがいてみたものの、和馬さんは自分の長い足でいとも容易く私の動きを封じた。

しかも、膝で私のスカートをたくし上げたり、足を擦り合わせたりと、妖しい熱を孕んだ動きをしてくる。

背の高い和馬さんが座つてもまだ余裕のある大きなソファ。はじめて腰かけたときには『うわぁ。ゆつたりできていいですねえ』と上機嫌になったが、今はこうして押し倒されても窮屈に感じない広さが恨めしい。だって、だって、あのときはソファに押し倒されるなんて、考えもしなかったんだもん！

「さあ、ユウカ。私の熱を冷ましてください」

慌てふためく私をよそに、和馬さんは唇を重ねてきた。ピタリと合わせたまま、ネロリと私の下唇を舐め、そして口内へと侵入しようとしてくる。

私は唇に力をこめ、彼の舌の動きを阻んだ。私だって、やられっぱなしじゃないんだからね！

けれど、そこで諦めてしまうような和馬さんではない。左腕一本で私の上半身を押さえ、右手でうなじをスルリと撫でる。

ほんの少しだけざらつとした指先が、ソワリ、ソワリと左耳の裏から首筋、鎖骨を撫で下ろす。

そして、今度はそれと逆の順番で撫で上げていく。腰の辺りから頭のとっぺんに向かって、ゾクゾクとした小さな痺れが走っていった。

何度も繰り返されるその動きに、とうとう私は我慢できなくなり、口元に入れた力を緩める。

するとすかさず和馬さんは舌を差し込んできた。私の舌を即座に捉え、しつとりと絡みつける。舌全体を舐られ、やがてクチュリという湿った音が聞こえはじめる。

途端に私の耳が熱く、赤くなった。

「んっ!!」

小さく呻いて和馬さんの胸を叩く。だけど何度叩いたところでダメージを与えることはできやしない。

——ま、待って！　せめて、シャワーを浴びさせて！

慌てる私の様子がおかしかったのか、和馬さんは唇を重ねたままクスツと笑った。彼に翻弄されて、恥ずかしいやら悔しいやら。

「ん、んんっ!!」

懸命に首を振って逃れようとする、和馬さんは素早く私の頬に触れてきた。

頬を包み込まれ、ますます動きが制限される。そして、和馬さんの舌の動きはさらに大胆になっていく。

和馬さんは唇をいったん離し、次は互いの舌を擦り合わせるような動きをする。ザラリとした彼の舌が私の舌裏に潜り込んで、スリスリと前後に動く。それに合わせて、子猫がミルクを飲むようなピチャピチャという音もする。

はじめてそんなところを刺激され、今までにない感覚が私のうなじをチリチリと焼いていった。

「ふ、う……」

鼻にかかった甘い吐息が漏れ出る。熱烈なキスに、私の体が蕩けはじめた証拠だ。

私の吐息を聞いて、和馬さんはまたクスリと笑う。そしてピタリと重ねていた唇をわずかに浮か

せた。

私と彼の唇の間に隙間ができたことで、いやらしい水音のはつきり聞こえるようになってしまう。ピチャリという水音が私の耳に届いて、またうなじがチリチリと熱くなった。

擦りつけるように動いていた彼の舌先が、今度は私の口内をくまなく舐めつくすような動きに変わる。頬の内側、歯列、舌の付け根と、しつこいほどに舐め上げていく。

その新たな動きによって、クチュクチュという湿った音が部屋に響いた。

恥ずかしくてたまらないのに、体の力が抜けてしまっている私は和馬さんにされるがまま。

「あ……」

グチュリという一段と大きな水音に、私は声を上げる。すると和馬さんは私の体に覆いかぶさった。真上から奥深くまで舌を差し込み、こちらの舌の根元をチロチロとくすぐってくる。かと思えば、きつく巻きつけてきて私の舌を吸い上げる。

互いの唾液が混ざるほどに舌を貪られ、頭がぼんやりと霞がかかっていく。明るいリビングでこんなにも激しいキスをされて、私は恥ずかしくて仕方ない。

そろそろ夕飯の支度をはじめなくてはいけないのに。

和馬さんのキスは私から全身の力だけではなく、思考までも奪っていく。

「や、あ……」

彼のワイシャツを握りしめていた手から力が抜け、ソファの座面に私の腕が投げ出される。

ピチャピチャと繰り返される水音をただボンヤリと聞いていると、私の頬にあつた彼の手が首の裏へ滑りこんだ。和馬さんはグツと手に力を入れて私の顔を引き寄せ、またピタリと唇を合わせてくる。

今まで以上に深いキスをされた。絡み、吸いつき、舐り、噛み……そんな彼のキスは、もはや『奪う』と表現がふさわしい。

「ふっ、ん、んっ……」

鼻を抜ける甘い吐息が止まらない。

自分の喘ぎ声に羞恥を煽られていると、和馬さんが体を捻って向きを変えてきた。

これまでは仰向けの私に彼が覆いかぶさる体勢で抱き合っていたのだが、今は私は右半身、和馬さんは左半身を下にして抱き合っている。

大人二人が横になっても広々としているこのソファ、燃やしてもいいですか！ 今まではベッドだけが危険地帯かと思っていたけれど、ソファも油断ならない。一つ勉強になった。

い、いや、そんなことよりも、やたらと熱のこもった猛攻を仕掛けてくる和馬さんを止めなくては！ これは確実にキスだけでは済まないパターンだ！

薄れゆく意識の中でそう思うものの、自分ではどうすることもできないほど力が抜けていた。彼の腕の中から抜け出すことはもちろん、起き上がることもさえできるかも怪しい。

「く、んっ、んん……」